栃木県歴史文化研究会会報

歴文だより

特集　大会報告および資料紹介

第 133 号
編集・発行
栃木県歴史文化研究会
事務局
〒320－0865
栃木県宇都宮市睦町2－2
栃木県立博物館内
TEL 028－634－1313
FAX 028－634－1310
郵便振替口座
00300－1－19207

田中大喜氏記念講演
「中世武士団の地域支配―肥前千葉氏を事例として―」を聞いて

稲川　裕己

近年の武士団研究では、武士団がどのような実態をもって地域支配を展開したのか、そして地域社会はどのように受容したかを、文献史料、考古学、民俗学、そしてフィールドワークによる分析など、多様な研究手法を駆使して明らかにしようとしている。今回の田中大喜氏（日本大学教授）の講演は、こうした多様な研究手法を用いた武士団の地域支配について触れられた。

まず、肥前国小城郡（現在の佐賀県佐賀市・小城市など）における鎌倉期千葉氏の本拠について、近世史料や聞き取り調査等に基づくと、円通寺一帯に比定できるという。武士の館と寺社は空間的に近接している事例が多く、足利氏と鑁阿寺の場合もその一つと捉えられ、このような拠点の在り方は、武士は宗教勢力と結びつき、領主としての責務（「民衆救済」）を実現しようとしたためであったという。

次に、千葉氏の本拠が円通寺一帯という想定で、同寺に残される二天（多聞天・持国天）像の制作意図が言及された。それは千葉氏の「民衆救済」（＝「撫民」）の実践で、他の武士団にもみられ、足利氏の場合は、鑁阿寺での一切経会が足利荘と簗田御厨の安穏を祈る法会であった。しかし地域住民にも負担を強いるものであったため、足利氏は一切経会の費用を抑えるという配慮をしたと田中氏は指摘する。

そして、武士団の地域支配にとって、宗教勢力は連携相手であり、競合相手でもあることが言及され、千葉氏と岩蔵寺の関係から具体的に論じられた。千葉氏が本拠とした円通寺周辺は、小城郡を灌漑する用水（水利権）を掌握する位置にあり、在来勢力よりも優位性を確保できる場所であったが、もともと円通寺に影響力を持つ岩蔵寺が同地の水利権を掌握していた。そのため、千葉氏は同寺との連携を図ったという。その一方で、千葉氏は岩蔵寺の内部対立に介入し、力の抑制を図った。また、千葉氏自身も岩蔵寺よりも高い宗教的な権威を獲得することで「脅威」となりうる岩蔵寺に対抗したという。

最後に、田中氏の講演を拝聴した感想を述べたい。氏の武士団の地域支配を文献史料のみならず、多様な手法を用いる研究姿勢に感銘を受けた。なかでもフィールドワークは、文献史料からは得られない灌漑や寺社と居館の位置関係などの情報が得ることができ、下野国の武士団でも有効かを試してみる必要があるとも感じた。

筆者も実際、田中氏の調査に同行し、研究室で史料を読んでいては得られない情報を得られる体験をし、大いなる刺激を受けた。

『栃木県史』以降、栃木県内の中世史研究は着実な進展を見せているものの、武士団の本拠については史料的な制約から、まだ確定していない事例もある。田中氏の研究手法を用い、新たな知見を提示することは可能であると確信している。

筆者も栃木県内の中世史研究者の末席に連なるものとして、田中氏の講演を拝聴し得た知見をもとに、研究手法を確立し、下野の武士団の地域支配を解明したいと思う。

以上が感想である。筆者の能力不足により、田中氏の講演の内容を誤って解釈している部分も少なからずあるかと思うが、どうかご海容いただきたい。

最後に、ご講演いただいた田中大喜氏に改めてお礼申し上げ、筆を擱きたいと思う。

【付記】今回の講演に関わる文献は次の通りである。田中氏の講演をより深く知りたい方はご覧いただければと思う。

・田中大喜「中世在地領主による「平和」の創成・維持と地域社会」（『人民の歴史学』二一七号、二〇一八年）
・同編『中世武家領主の世界　現地と文献・モノから探る』（勉誠出版、二〇二一年）
・同「肥前千葉氏の本拠形成と領主支配」（『国立歴史民俗博物館研究報告』二四五集、二〇二四年）